

奈良時代仏堂建築の 平面(柱配置)と屋根形式

—寄棟造と入母屋造について—

はじめに 古代建築の平面と屋根形式の関係については、身舎と庇の関係で論じられ、四面に庇がとりつく場合は、入母屋造あるいは寄棟造と説明される。そして入母屋造、寄棟造の使い分けについては、建物の格などによって定められるというのが、おおかたの見解だと思う。

しかし、屋根(小屋組)を載せる軸組は、入母屋造だろうと寄棟造だろうと関係ないのだろうか。本稿はこのような素朴な疑問から出発したもので、本格的な建物の屋根形式である入母屋造と寄棟造について、金堂と講堂を資料に考察した。

金堂の平面と屋根形式 資料の数が少なく断定できないが、以下のような特徴が見られる(図1・2参照)。

- ・規模は七間堂が標準。大寺においては裳階がつく。
- ・桁行柱間は、中央間を広くとり端ほど狭くなる。
- ・身舎の梁行の柱間が桁行中央間より狭い。
- ・屋根は寄棟造が主流。

(飛鳥時代金堂との比較)

- ・飛鳥時代金堂より格段に規模が大きい。
- ・飛鳥時代金堂は絶対規模がどれもほぼ同じであるのに対し、大きさがバラエティーに富む。
- ・飛鳥時代金堂には中央間を広くとり、端にいくにしたがい狭くするやり方が見られない。
- ・飛鳥時代金堂の屋根については、法隆寺金堂は入母屋造である。他については資料がなく不明である。
- ・法隆寺金堂は二重であるが、奈良時代金堂は薬師寺金堂が二重という例はあるものの、一重が一般的。

講堂の平面と屋根形式 以下のような特徴が見られる(図2参照)。

- ・同じ寺院の場合、金堂より規模が大きい。
- ・身舎の奥行きが深い。
- ・金堂のような柱配置はしない。
- ・屋根形式については、唐招提寺が宮殿を講堂に改築する際、切妻造を入母屋造にあたらめていること、再建にあたり旧規をまもる興福寺講堂が少なくとも中世には入母屋造であった(絵画資料)点などから、入母屋造が一般的であったと推定される。

金堂に見られる特徴的な柱配置の解釈 奈良時代金堂に

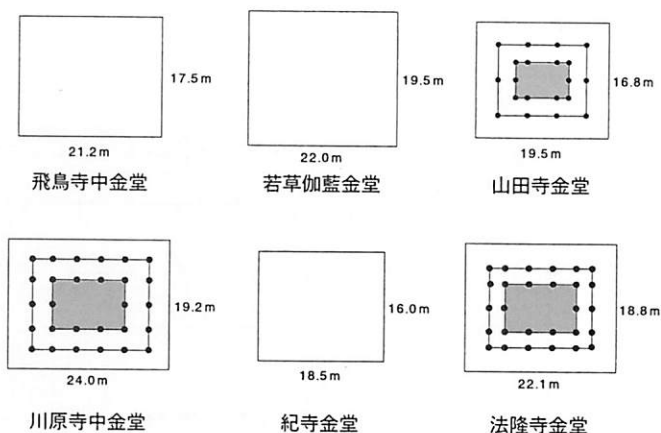


図1 飛鳥時代金堂の平面規模(図2と同縮尺)
数字は基壇の規模を表す

は、講堂にも飛鳥時代金堂にも見られない特徴がある。なかでも柱配置は独特で、この要因について検討することは、奈良時代金堂を知る上で避けて通ることのできないものとする。

柱配置の他に、金堂においては次のような特徴がある。

- ・寄棟造であること。
- ・身舎の奥行が狭いこと。

また、金堂の平面・屋根に関する機能、用途上等の条件として、以下のような点があげられよう。

- ・桁行の柱間、とくに中央間は、安置される仏像の大きさにふさわしい広さにすること。
- ・屋根は格式の高い寄棟造とすること。

本格的な寄棟造建築の小屋組の詳細が知れないなど、資料的に乏しく推定の域を出ないのであるが、次のような解釈を提示したい(図3参照)。

- ・寄棟造の場合、隅木が柱の立たない身舎の内までのびるため、構造上の問題から入母屋造と比較して身舎の奥行を深くできない。
- ・隅木の端部は、柱筋間につけられた梁上の束で受けることになるが、そのため正背面隅木の交点を柱筋から大きくはずすことはできない。つまり身舎の隅の梁行、桁行の間はほぼ同じである必要がある。
- ・一方、本格的な金堂建築においては、丈六仏のような大型の仏像が安置されるから、中央間は相当広くする必要がある。

このような諸条件・制約を解決する策として、中央間を広くとり、端ほど狭くするという独特な柱配置が生み出されたのではないだろうか。つまり、金堂において屋根を格式の高い様式である寄棟造とすることにあたり、軸部もそれにふさわしい構造(柱配置)となったと考える。このように解釈すると、講堂の柱配置が金堂のようになっていないことも理解できる。

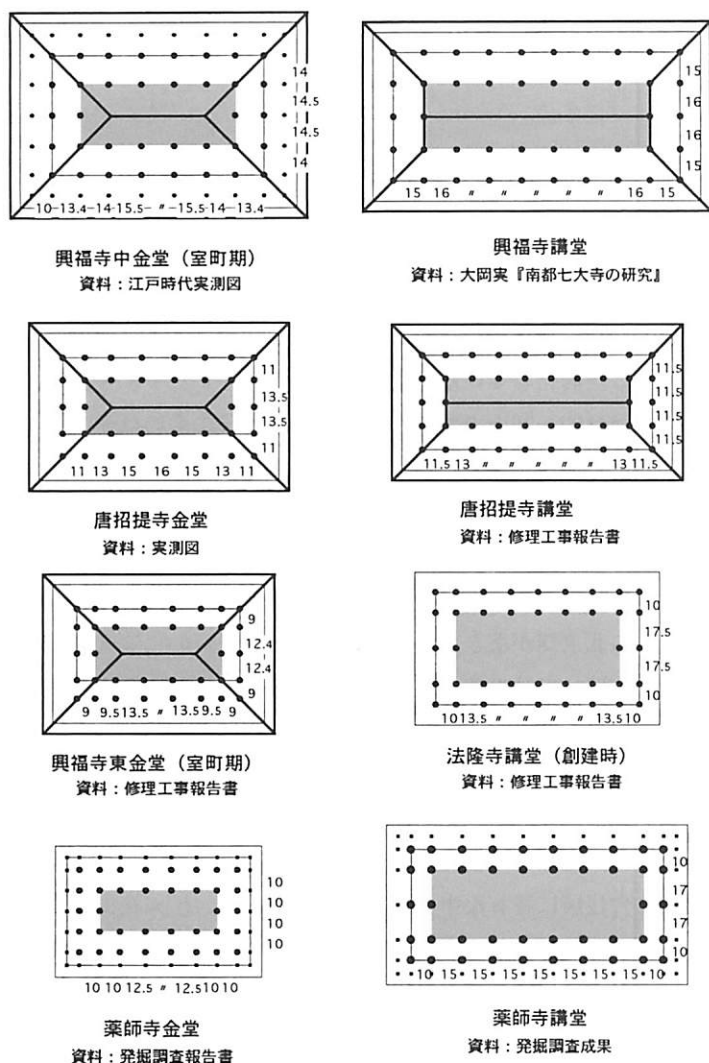


図2 奈良時代の金堂・講堂の平面と屋根形式
数字は柱間寸法（単位は尺）、太線は屋根を表す

天平創建時東大寺金堂の屋根形式 先に述べた解釈をもとに、天平の東大寺金堂の屋根形式について検討してみたい。

この金堂は身舎の奥行きが78尺という、他の金堂とは比較にならないほどの規模をもつ（図4参照）。屋根形式については、『東大寺山堺四至図』（正倉院蔵）に描かれた金堂の姿から、寄棟造と考えられている（『奈良六大寺大観』など）。

ところで、大岡実『南都七大寺の研究』のなかで、鎌倉再建の金堂について、平面規模は天平のものを踏襲しているものの、身舎内部に左右4本ずつ計8本の柱を追加していることを明らかにしている（図4参照）。柱を追加した理由については、「大仏様が貫を多用して建物の架構を固め、これによって部材断面を節約するという構造理念に立脚しているため（中略）本来ならば、六本かけるべき大虹梁を、大仏の直上の二本だけを残して、その両脇の四本を節約し、柱と貫の構法によった」とする。大仏様という様式が、柱の追加を要求したという解釈である。

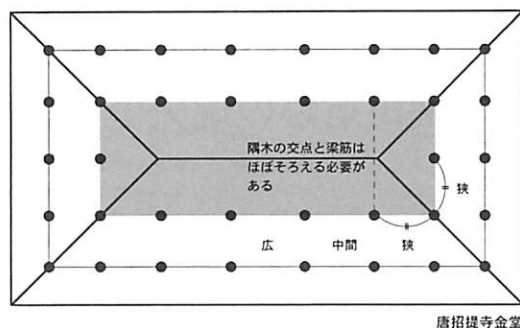


図3 寄棟造の場合の隅木の納まり・柱位置

隅木が柱の立たない身舎の中まで延びるが、身舎内の隅木の長さには限界があり、入母屋造ほど身舎の奥行きを大きくできない。隅木の端は東でうけるが、東の位置は梁が渡される柱筋となるため、身舎の桁行端間と梁行の柱間はほぼ同じにする必要がある。しかしそれは前述のように広くできない。また大寺の場合、大きな本尊を設置するためには、中央間は広くする必要がある。以上の条件を処理するために、中央間を広くとり、端間に行くにしたがって狭めていくやり方が生まれた。

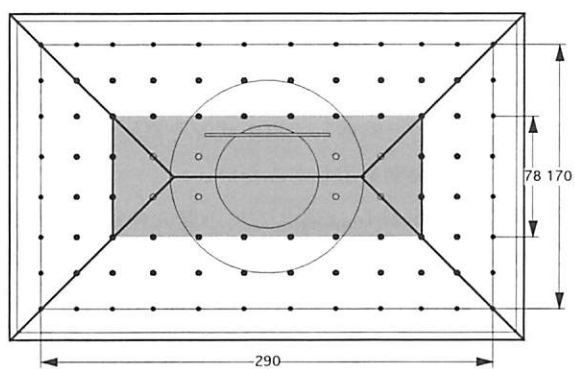


図4 天平・鎌倉時の東大寺金堂平面図（単位は尺）

身舎内に立つ左右4本、計8本の柱は、鎌倉再興時に追加された。屋根を入母屋造から寄棟造に改めたことに伴い、隅木を支持するため8本の柱（白丸）を追加したと思われる。

しかし、先に述べた平面と屋根形式の理屈に従えば、以下のようにも解釈できる。

- ・天平の東大寺金堂は、大仏との関係から極めて奥深い身舎となり、構造上の理由から入母屋造にした。
- ・鎌倉再建時、屋根を寄棟造に変更することになり、それに付随して身舎内に柱を追加し隅木端を支えた。

まとめ 平面（特に柱配置）と屋根形式の関係について、新たな見解を示した。すなわち奈良時代金堂に見られる特徴的な柱配置は、寄棟造という屋根形式からくる構造的制約と、大型仏像を納めるという用途・機能上の条件などを満たすために生み出された。それに対し、講堂のように奥行きの深い、広い空間を必要とする建物においては、構造的な理由から入母屋造とした。以上のように、平面と屋根形式はそれぞれ独立したものではなく、密接な関係をもつものである。

また、この解釈をもとにすると、天平創建時の東大寺金堂の屋根は、入母屋造であったと考えられる。

（村田健一／建造物研究室）